

初夏の産業観光めぐり

会津の地名の『津』が表すとおり、会津地域は豊富な水資源で溢れています。近代、水力発電が地域経済の成長を支え、近年では水資源を利用した半導体産業などの多様な製造業が立地しました。現在では、地熱・バイオマス・風力・太陽光などの再生可能エネルギー産業や、日本初のコンピュータ専門大学である会津大学を中心としたICT産業も集積されています。

歴史的・文化的に価値ある産業文化財などを通じて、特色ある地域の産業に触れる『産業観光』。今回のフォトアルバムでは、会津地域の特色である『豊富な水資源』に触れる産業観光スポットを紹介します。

猪苗代第一発電所

猪苗代湖の豊富な水量を利用して、長距離高圧送電の時代に入るきっかけを作ったのが猪苗代第一発電所です。大正3年に使用開始され東京都への約200kmに及ぶ長距離高圧送電に初めて成功しました。山の急斜面を這う6条の水圧鉄管は圧巻です。

(撮影日：2016年6月17日)

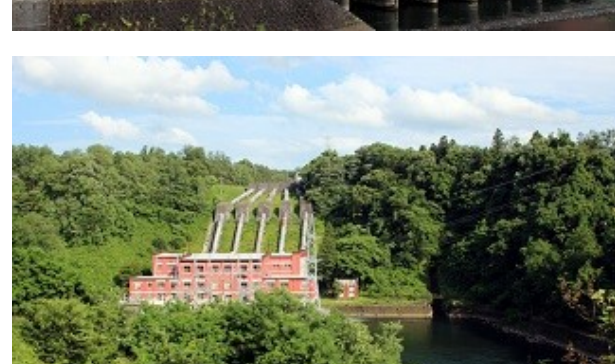


猪苗代第二発電所



猪苗代第一発電所建設から、わずか2年半で建設され、大正7年から現在まで水力発電所として稼働しています。印象的な赤煉瓦の建物は、東京駅を設計した辰野金吾が監修しました。

(撮影日：2016年6月17日)



東山ダム

東山ダムは阿賀野川水系、会津若松市東山町大字湯本内に多目的ダムとして建設されたもので、湯川の総合開発の一環をなすものです。昭和43年の予備調査より、14年半の歳月を費やして完成しました。主な効果は洪水調節、既得取水の安定化・河川環境の保全、上水道水の供給となっています。

施設見学やダムカードの配布も行っています。記念に収集してみるのも楽しいですね。

(撮影日：2016年6月20日)



大川ダム

阿賀野川水系本川の福島県会津地方に位置し、洪水調節、洪水の正常な機能の維持、かんがい用水、水道用水、工業用水の確保、揚水式及びダム式発電を目的としています。ダム周辺にはアナグマ、モズ、ハコネサンショウウオ、ヤマカガシ、オオムラサキなど多種多様な生き物が生息しています。

(撮影日：2016年6月20日)



十六橋水門



十六橋水門は猪苗代湖を水源とし、会津地域と郡山地域への取水のため、湖の水位を調整する水門です。

安積地方（現郡山市）は、年間雨量が少なく荒れ果てた原野でした。そのため、農作業の発展が遅れ、水利施設の建設が急がれる土地でした。そこで、猪苗代湖の水を郡山盆地まで導水する安積疏水計画が持ち上がりました。

しかし、猪苗代湖の西側の村人は、工事により湖の水が減ってしまうのではないかと危惧しました。国は会津方面の人々に配慮し安積疏水の工事は十六橋から始まりました。

この安積疎水の大事業により、会津地域の用水を確保するとともに、水路によって拓かれた郡山地域は急速な発展を遂げるようになります。

(撮影日：2016年6月17日)



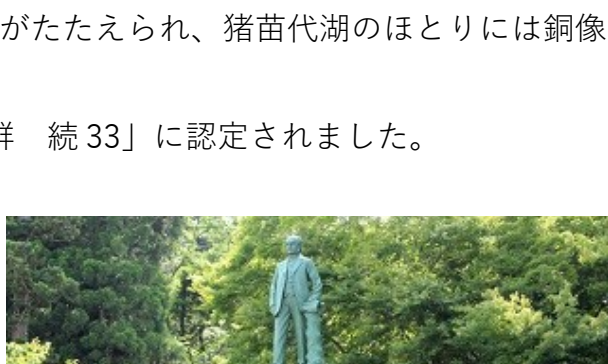
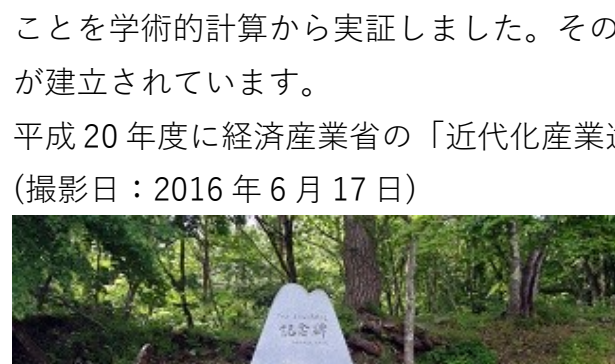
ファン・ドールン銅像

明治11年、明治政府の招きでオランダ人技師ファン・ドールンは、安積疏水の計画にあたります。

猪苗代湖の自然水位を変えず、会津側の人々の水利用に支障なく、安積疏水で排水できることを学術的計算から実証しました。その功績がたたえられ、猪苗代湖のほとりには銅像が建立されています。

平成20年度に経済産業省の「近代化産業遺産群 続33」に認定されました。

(撮影日：2016年6月17日)



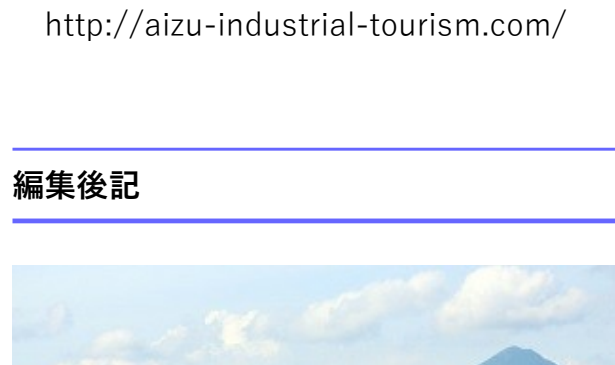
会津若松市では、平成27年4月8日に策定した「会津若松市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の柱の一つに「歴史・文化観光や産業・教育観光による地域連携と交流促進」を掲げ、産業観光の推進に取り組んでいます。

会津の産業観光について、詳しくは、「会津地域産業観光ガイド」をご覧ください。

■ 会津地域産業観光ガイド

<http://aizu-industrial-tourism.com/>

編集後記



取材中、猪苗代湖へ立ち寄ってみました。湖水浴シーズンや本格的なマリンスポーツシーズン前のため、まだ人は疎らでしたが、初夏の季節、周辺に咲く紫陽花、ピンクや白の夕アオイに目を引かれ、これからの本格的な夏の到来を感じるひと時でした。